

感情の侮辱：論説

著者	高田，保馬
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 1 2
ページ	1 - 7
発行年	1905-06-19
URL	http://hdl.handle.net/2298/5832

龍南會雜誌 第百十二號

論 說

感情の侮辱

高 田 保 馬

時潮の奔流澎湃として襲ひ來る所、友よ、一葉迷想の扁舟をうかべみよ、逆航茫として五十年、纔を岸上に投じて佇回顧望、果して何をか感ぜむとはする。

光榮ありし島帝國の當時よ、壓制と苛酷とに汲々たりし徳川幕府の存在はしばらく問ふこと勿れ、勤王の烈夫と憂國の志士か、爛たる眼眸はひとへに未來の理想に向つて輝き、双頬の滯涙は日夜急霰よりもしばし。青春の鮮血胸に躍りて聲あり、熱誠洶湧包むに短軀の足らざるを奈何、半夜蹶起、抱いて父祖が石碑に別れ、飄揚遠く去りて三千里、君國の救済これわが一身、夢幻の生命これ犠牲の一片、鋒刃に仆れ劍戟に委せむはもとこれ宿志、さばれ仰望、星辰の燦爛を數ふ、時未だいたらず、或は去りて玄海の波浪に浮び或は富嶽の山靈に泣訴す、一夜碧昊に聲あり、流星遠く落つ錦江の灣、奮躍投合して悲歌慷慨、神洲の正氣ここに始めて發し、歴史は追窮せられて轉一轉、果然あらはれ來りしものまことに彼等が眞生命の軀現にあらざりしか。

さばれ社會は活機也、停止をしらず、沈滞を許さず、當時のチョン鬚は散髪となり、兩刀はステツキに變じ、陣羽織はコートに代り、而して駕輿の風流は氣車の疾便に化し去りぬ。げにや時潮の暴

威を逞くする所、帝王の玉冠其光輝を失ひ、美人が秋波其魔力いづくにありや、有象無象、天籟地籟、たゞ默従を許認せらるゝのみ、而して見よ、昔日の廉恥節操謹嚴、其倂をしも誰か求めうべき。的奕たる西歐の文化は、散髪と共に、ステッキと共に、ユートと共に、芳草が招く東風の如くに輸入せられ、世を蔽ふものはこれ實利の低卑なる思想のみ。嫌厭嘔吐、遂に之か爲に涕泣せざるもの汝は畢竟天下の志士に非ず。今人の解剖は極めて簡單なり、之を三分せよ、一は錢神の崇拜、一は權利の追求、一は肉慾の飽充、之を除いて空のまた空、高遠の理想と信念の渴仰と情絶の情操と、彼等が夢にだも學び得る所ならむや。最後の目的は自己が威嚴の確定に非ずして物質界に於ける成効也、唯一の希望は動物としての願欲にして其人たる所以を去る事遠し。不平あらば現在の榮華に欠けたる痛哭也、名利を捕捉しうるや歡聲と隨喜の涕淚と相次で至る、高官と巨富とは天下衆望の標的、のみならむや自ら之を指して人生至大の重寶と云ふ。乞ふしばらく嘲罵する勿れ、彼等はかくて偏に之に向て直往し、邁進し、之を獲得し、享受せむとするに汲々たり。而も自己が名利を得る所以は他人の名利を得る所以に非ず、主我也、排他也、一般の意義に於ける利己は兼愛仁慈と相平行し共存しうべきものに非ず。氷炭の如く水火の如し。彼等已に水をとる氷を擇べり、焉ぞ炭火を容れむや。しかも胸中無弦の琴線は美妙なる感情をかなでくやまず、さばれこれ到底利己を傷害し危険にする所以、斷々として排し去らざるべからず。よらむは唯これ氷鐵の如き意志、彼等が最大の發見はこゝにあり、思へらく人生成効の秘訣は鞏固不動の意志にあり、感情の如き吾人が道程に何等の貢獻をなすものに非ず。事業に寄與するよりも、之あるは偶以て失敗と慘禍とに導く所以

、見よ、意志は吾人が唯一の武器也、感情はむしろ之が障碍のみと、然りかくの如き意志の偏重は、實利思想の波及と共に傳播せられて、今や其極度に達し、感情は殆世人自ら之を藏して鴆毒の如く砒石の如し。得べくんば之か絶滅せられむを夢想するに至る、何等顯象の奇怪ぞ、しかも是れ事實なり。四圍の變作のたねす確証し示教しつゝあるもの、遂に其存在を否定すべからざるに非ずや。

思へ、覆載の間そこに無用にして有害なる一物もありや。相倚相助、畢く其妙用の絶好を遂ぐるを見む、而も彼等は曰はむ、一物あり、われにあり、感情即これと、然らば問はむ、熾烈なる感情を伴はざる意志に果してに何等の力あり、何等の事業ありやと。

客窓半夜、遊冶公子がうたにきく、「はれて通へば千里も一里、あはでもごればまた千里」、卑近也、淺薄也、されども不變の眞理は往々哲人が宏濶の著書に宿るを欲せずして、眞率飾らざる野人が隻語に存す。あゝ彼可憐の多恨兒、孤衾嬋娟の容姿は眼前に彷彿し來りて、枕上夢圓からず、渾身の熱血益沸騰し來りて、懷慕の幽懷今や滿腔、手に力あり、しゝむら自ら鳴る。蹶起、朦朧の月明に乗じすさびゆく銀笛の曲や何、嘈々切々、晚風颯として鬢を拂へば落花飛び去ること繽紛。一念こゝに凝りて道程の遙遠をしらず、今やイむ吾妹か桃花の門、門扉深う鎖して我望こゝに絶ゆ、蛾眉廣野に沈みて、暗黒たゞ紛香を包む、飯らむかな、悄然踵を回せども、われに何等の歡喜、何等の希望、兩脚蒼鉛を結むでひとへに飯路の難澁を思ふ。感情を伴はざりし意志を見よ、彼に果して何等活躍の力ありしや、生動の氣ありしや、冷靜にして沈着なる意はたしかにこれあり、飯らむこと

これ。しかも原動の根本を欠ぐ、愁然として一步又一步、熾烈の熱情に激發せられたる彼と其物質分子の構造寸毫の相違なくして全一事業の難易かく相全じからざるもの、たゞこれ壯盛なる感情の力のみ。

意と情とのかくの如き關係は決して戀愛の例に於てのみ存するものに非ず、今其煩にたへずと雖百般のこと之を精査すれば盡く然るを認む。畢竟熾烈なる感情に伴はざる意志はそれ自身に於て何等の勢力と威嚴とを有するものに非ず。其沈滞せず底止せざるは僅に周圍の運動が之を助成するあれば也。さながらこれ、時計の齒輪の自己に毫厘の動力を有せざるも、四邊の狀況に屈して不知不覺の中、左旋右回するに過ぎざるのみ。已に必要と已を得ざるに動く、之を以て動其軌を脱せず、又停遲を許さず、秩序あり、整列あり、順序あり、規矩あり、社會は以て極端なる平靜と安寧とに愉樂するを得む。衝突や、爭乱や、紛擾や、必然の結果として除去せらるべきものたれば也。されども記せよ、生命なく活氣なき安靜は、人生進化の道程に於て當然呪咀せらるべき最不祥事たるを、不斷の變化と連續せる改新、これなくば社會は一の死物のみ、腐蝕と消滅と日を數へて期待すべきに非ずや。而して此種の活動は到底、常識以外に超越せざる冷靜なる意志のよくする所に非ずして、強大なる意志の所作にまつべきのみ。強大なる意志とは何ぞや、激烈なる感情を伴ひ、之を以て其原動力となせる意志これ也。

彩光燦たる人生過去の歷程をして、もし幾多歴史の人を有せざらしめば、而して以後地球の表面よりして長へにあらゆる天才を一掃し去らば、吾人は遂に社會の存在し、また存在し得たるべき理由

を發見する能はざる也。乞ふらくば奇矯の評語を辞するも尙叫ぶを得むか、吾人生存の恩惠はこれ幾多歴史的人物の賜也と、而も彼等が振天の功業と不朽の述作との由りて來る所を見る、たゞ平凡を超絶して九天の高きに翱翔せるにあり。其感情は已に――高潮し激發せられて塵界を離脱す、意志はこゝに於て萬鈞の強力あり、奔放の雄勢あり、區々たる習慣常識の障害抑壓、これに對する時微塵の權勢なく威力なし、赫々としてひとり地上に印せらるゝものは其真人か痕跡也。

要するに、社會を以て一の有機體とせば個人は當に其細胞也、個體を組織せる各細胞は到底個體の一部分をも變動せしむる能はざるは、已に學者の説いて陳なる所、是を以て一細胞の個人を以てして社會に其痕跡を印せんは、常識の得て窺ふべき所に非ず。ただ激發の眞情至誠、自己に絶大の變化を遂げ、胸中熱火の炎々たるもの、ひそり其變化せる形態を以て悠然他の細胞に雄飛し、其熱火を点してはじめて社會に光明あり、改新あり、真人か個焉高擧、庸俗の上に倨座するもの豈他あらむや。

大聖孔子が大陸四億の民心を支配するものは、陳に餓へ蔡に飢へて居せず、韋編を三絶して覺らざりし熱誠に非るか、釋迦が菩提樹下洞然の却火は其大慈悲心の發現にあらざりしか。基督が隱然地球に於ける不死の帝王たるものは廣汎なる眞愛の賜に非るか。アレキサンダーをして雄奔歐弗亞の三州を蹂躪せしめたるものは彼が世界統一の詩的熱情にあらざりしが、ワシントンをして十三州の自由を叫ばしめ、ナポレオンをして全歐の金冠に頭上を飾らしめ、トルストイをして永遠の平和を唱導せしめたるもの、盡くたゞこの感情の力。

カ・スタイルは教へて曰く、天の冥寵を得たる天才の地上に降下するや、彼は下界の形態に應じて便宜なる形態をとる、時としては爲政家となり、時としては軍人となり、時としては豫言者となり、詩人となるも、尽くこれもと同一物と、砲煙の裡生死を劍戟に委する戦場の英雄と、たとへば江湖に放浪して一管の筆に幽艶の情熱を托する詩人と何ぞ相似ざるの甚しきや。さばれ彼等の異なるは外形の假装にあり、彼等か天才たる所以のものはたゞ胸中洶湧せる熱血のみ、神來の感興のみ、天才は狂也と云ふ、其狂に近きは世と相容れざるあれば也、舉世混濁、みな蠢々として歴史と習慣との束縛に黙従する時に當り、彼やひとり自醒めたり、九天の靈光炳として淋しき胸中を射てより、感應礪焉として八孔九竅に及び、渾身これ熱情の權化、たゞ理想の遙遠を標的として、漂々乎、一切の壓制桎梏尽く彼になし。塵界の萬有を超脱し、行ふ所欲するがまゝ、たとへば天半白雲の徂徠するが如きか、果然世人は狂を叫ばざるを得ざる也、而れども天才よりして此熱情を控除し去らば残す所果して何物ぞ、機智はあらむ、技巧はあらむ、膽あらむ、辨あらむ。而も統一なく生命なくんば人生の事畢竟零也。天才の尊貴と威嚴とは偏に狂なる所以に存す、即あらゆる種類の天才は盡く此一點に合一し、融化し冥合す。到底彼等は種々の同素臍也。0の存在は時として0₂たり、0₃たり、0₂の存在は時として石墨たり、石炭たり、金剛石たり。天才の形態相似ざる事甚しと雖、もど同一質、もしそれ四圍の位置と狀況とを交換しうべくんば、トルストイは那翁たらむ、セークスピアは基督たらむ。

要するに社會の變化と革新とは天才の事業にまち、天才の事業は狂熱によりて成る、遠きを道ふ勿

れ、恩を忘るゝ勿れ、維新鴻業の原動力たりしものは何ぞや、憂憤激楚、過去と習慣とを超越し去りて孤劍短褐、義を叫びて狂熱奔放、一死以て天下を購はむとせし幾多歴史の人に非りしか、島帝國現時の隆盛以て維新の賜也と云ひうべくんば、五千萬の同胞が最大恩人は實にこれら歴史の人也。啼泣して感謝すべきは彼等が犠牲的狂熱也。感情の勢力也。星霜僅に卅有八、天下は實利思想の混濁する所となり、扶桑君子の國將に滔々として忘恩者なる稱號を甘受せむとす、冷靜の意志を追求して、絶大なる強熱の力、彼等は全く之を忘却し、進んで説くにそか害毒の萌芽たるを以てす。感情の侮辱せられたる現代の如きは、寡聞吾人が未だ耳にせざる所。

夏若うして蛙鳴閣たり、新緑野に溢れて葉風に何の私語、仰げ、まことやこれ天地生生の氣、畢竟六合の存在はかくて無限の熱による、茫漠として平沙限なき大地の慈懷を思へ、炎々たる鉄火は其中心に磐礴せるに非ずや、爛として聲なき金鳥が征矢は白熱の表現、整然たる星辰の運行は尽く猛烈なる火力にまつ。宇宙萬象の生動と活氣とは熱を外にして存在せざる也、あゝ徒に冷靜の意志を説く勿れ、意志の鞏固を欲する者は須く之に先ちて感情の旺盛を覚めざるべからず、トルストイが保持せる人格はこれ、孟子が浩然の氣はこれ。然らずんば徒に社會を腐蝕に導く賊たらむ。吾人は平凡を排す、過去の寰内に跼蹐するものに抗す、社會は救はれざるべかられば也。

(卅八年五月十四日稿)